

日・中両国における中学校体育の目標と内容の比較分析 —宮城県と瀋陽市の比較分析—

白 翠瑾 石川 旦

キーワード：体育 中学校 学習指導要領 目標 内容 比較研究

Comparative analysis of objectives and contents of physical education in junior high schools in China and Japan —Miyagi Prefecture and Shenyang City—

Bai Cuijin Noboru Ishikawa

Abstract

This study was intended to compare the backgrounds of physical education (PE), aims and objectives and contents set forth in junior high school course of study in PE, and perceived ratings of accomplishment of objectives by junior high school PE teachers and students between China and Japan. The background information was mainly obtained in council documents issued by governmental organizations, and separate questionnaires on perceived ratings (Likert scale) were administered to all PE teachers in junior high schools in a prefecture in Japan and a city in China (Japan: 513 and China: 301), and selected students (Japan: 327 and China: 281) on the spot in 5 (China) and 10 (Japan) schools which were arbitrarily chosen in each of the same locations. Teachers, responded by mail, were 211 (41.1%) in Japan and 152 (50.5%) in China. The rating averages were t-tested by SPSS12.0.

Recent social background in both countries has come to be quite similar; therefore, the objectives and specific goals set forth in both countries' course of study in PE seemed to be almost identical. However, there were differences in the ways of treating movement contents between both countries. In China, the relationships between objectives and contents seemed to be conceptualized more reasonably. In general, Chinese PE teachers rated higher their achievements than their Japanese counterparts and in both countries teachers showed higher ratings than their students. However, in gymnastics, martial arts, dance and knowledge understanding, students in both countries showed their difficulty in achieving their objectives, even though teachers' ratings were higher than those of students. We need to testify whether these findings were demonstrating actual differences in achievements of objectives in both countries through scientific methods and procedures.

Key Words: physical education, junior high school, course of study, objectives, comparison

I. はじめに

中国の政府が初めて比較的完全な教育制度を公布してから、学校体育は100年程経過した。この100年の間に、中国の学校体育は何度も彷徨って、その方向を模索してきた。この間に徐々に幼年期から熟成期に向かってきた。

現在、科学技術の発展と経済の地球化に伴って、人間社会における物質文明と思想文化の進展に伴い、生活水準が総体的に大きく向上した。また人類の多くの疾病がほとんど治療されるようになった。そして、健康状態が大きく改善されてきた。

しかし、近代の産業の発達や生活様式の変化が、身体的な活動量を減少させ、心理的なプレッシャーを増大させるという事態を引き起こしてきている。これは人類の健康に多大な影響を及ぼし、多くの先進諸国においても脅威となっている。

健康とは虚弱でなく疾病がないというだけでなく、身体的、精神的及び社会的発展の方向において、完璧な状態に維持されることである。このことを我々は少しずつ理解し始めてきていると云ってよい。この完璧な状態を維持するために、我々は学校における体育課程を重視し、更にそれを発展させることが重要である。

中国共産党中央・國務院による《教育改革をさらに進めるために素質教育を全面的に推進する決定》²⁾では、次のことを指摘している。「健康な体格は祖国と人民のために働く青少年の基本条件であり、これは中華民族の旺盛な生命力の体现でもある。学校教育は“健康を第一”という基本思想を確立して、体育教育を適切に強化してゆきたい。」そして2001年秋から新しい《全日制の義務教育、ならびに普通の高等学校における「体育」(1~6学年)「体育与健康」(7~12学年)の課程標準》(以下略称「課程標準」)の試案が、正にこの思想の指導下に制定された。

「課程標準」は「先実験、後普及」の原則により、2002年から、各省級教育行政部門から小学校と中学校を3%程度、そして2つ以上の高等学校を確定して、「課程標準」を実施し、2003年から実施の比率が50%以上に広げられ、2004年から各級各級の学校で全面实施されることになった。

中国の「体育」の言葉は日本から輸入された³⁾。日本はアジアの先進的な国家として、学校教育において大量の西方先進国の教育思想を導入した。しかも東西両文化を有機的に結びつけた系統立った比較的完全な教育体系もっている。

日本の学校体育は学校教育の重要な部分として、十分な認識を得ているように見える。日本が法的な拘束力を持つ学習指導要領を告示したのは1958年のときである。いわゆるナショナルカリキュラムである。それ以来、社会の変化などに対応するということから、ほぼ10年ごと

に改訂されてきた。

現行の学習指導要領は平成8年7月の中央教育審議会第一次答申と平成10年7月の教育課程審議会答申の内容を踏まえて改訂されたものである。新しい学習指導要領のポイントは、「ゆとり」であり、「生きる力」である。その他「内容の厳選」、「体験的学習」、「心の教育」など、いろいろとあげることができるが、最大のものは「生きる力」の育成を実現するための「教え込み教育からの脱皮」であろう⁴⁾。

体育の目標は、体育という教科で教えるべき教科内容の選択の基準であり、学習指導法を規定するものである。さらに、単元の目標や1時間の授業の目標(ねらい)も、この体育の目標から導かれる。このような意味では、体育の目標は体育という教科の性格を表したり、教科の存在意義を端的に示すだけではなく、実際に授業に際して必要とされる学習指導目標の根幹に位置づくものであると云ってよい。

体育の目標を達成するためには、教科として計画的にかつ意図的に、知識・技能・態度・習慣において、「どのような事柄」を習得させたらよいかを考える必要がある。その「どのような事柄」が学習内容にあたるわけである。体育の内容は主として運動と知識の二つの面から構成されるという特色を持っており、運動とその知識が有機的に結びつき、はじめて学習内容の意味が生じるわけである。さらに、態度とか習慣の内容を含むことによって、体育が成立している。

もし学校体育を人と見なすなら、体育目標は人の思想であり、体育教育の内容は人の能力・資質になる。良い思想と新しい能力・資質がなくなったら人の活力はなくなる。学校体育がいつも時代にそぐわない一定不変の目標と内容で指導されるとしたら、学校体育は魅力を失ってしまうであろう。目標と内容は学校体育の必要な要素である。

本研究では、まず日本の現行の「中学校学習指導要領」と中国の現行「課程標準」に基づいて、両国における体育の目標と内容を分析し、さらに両国の中学校の教師と生徒に対して、実際に「学習指導要領」あるいは「課程標準」に示された目標と内容に関して、どの程度達成できると考えているか、それぞれの自己達成度・自己意識・評価などを調査して、比較・分析することを目的とする。

II. 研究方法

1. 文献研究法

主要答申及び解説書類などにより、日本と中国の体育(中学校体育)を規定する背景的要因を概観し、「学習指導要領」と「課程標準」により、両国において設定されている体育の目標、具体的なねらい及び内容を比較検討する。

2. 質問紙法

(1) 調査対象

本研究は、日本の宮城県内の中学校保健体育教師 513 名、任意に選択した中学校 10 校の 3 年生 327 名と、中国の瀋陽市内の中学校体育教師 301 名中の 160 名、任意に選択した中学校 5 校の 2 年生 281 名を対象とし、体育における目標・内容に関する達成度の自己評価を調査した。そして、日本の教師の回収数は 211 枚、有効回答率 98%、中国の教師の回収数は 152 枚、有効回答率は 93%、日本の生徒の回収数は 327 枚、有効回答率は 100%、中国の生徒の回収数は 281 枚、有効回答率 93%であった。

(2) 調査期間

平成 16 年 6 月末から 10 月初の間で調査した。

(3) 調査内容

- 1) 運動内容：体づくり、器械運動、陸上競技、球技、武道（術）、ダンス
- 2) 知識
- 3) 困難に挑戦すること
- 4) 心と体を一体として発達すること
- 5) 運動や健康・安全について理解すること
- 6) 運動を合理的に実践すること
- 7) 積極的に運動に親しむ資質や能力を育てること（教師）
- 8) 健康の保持増進のための実践力の育成と体力を向上させること（教師）
- 9) 明るく豊かな生活を営む態度を育てること
- 10) 運動の楽しさや喜びを味わうこと
- 11) 運動の中で正しく競争や協同すること
- 12) 互いに協力して責任を果たすこと（教師）
- 13) 目標・内容についての評価(教師)
- 14) 体育授業の内容に満足すること（生徒）
- 15) 運動の好き・嫌い(生徒)
- 16) 体育の授業の好き・嫌い(生徒)

3. 統計処理法：

「体づくり」等の諸項目について、各群のリッカート法による評価の平均値を求め、SPSS12.0 による T 検定を用いて処理した。

III. 結果

1. 日・中両国の時代的背景と考え方の重点：

日本では受験競争の過熱化、いじめや不登校の問題、学校外での社会体験の不足など、豊かな人間性をはぐくむべきこの時期の教育に様々な課題が生じている。その背景のもとに日本の体育学習指導要領の目標は(ア)心と体を一体としてとらえ、「積極的に運動に親しむ資質や能

力の育成」、「健康の保持増進のための実践力の育成」及び「体力の向上」の 3 つが密接に関連していることを重視する。(イ)運動の課題を持ち、自ら考えたり活動を工夫したりして、その課題を解決することを重視する。(ウ)自らの健康を適切に管理し、改善していくための資質や能力の育成を重視する。中国では、「健康な体格は祖国と人民のために働く青少年の基本条件で、これは中華民族の旺盛な生命力の体现でもある。学校教育は“健康を第一”という基本思想を確立して、体育教育を適切に強化してゆきたい」との思想の下、(ア)「健康第一」の指導理念の堅持と生徒の健康的成長の促進、(イ)運動への興味の刺激、生徒の生涯体育意識の育成、(ウ)生徒の発達を中心として、生徒の主体地位の重視、及び(エ)個人差によって、すべての生徒が利益を受けることを確保することを重視している。

2. 体育の究極的目標のもとに設定される課程目標：

表 1 に、日本の中学校の「学習指導要領」と中国の「課程標準」の相当部分における目標を示す。

日本は中国より簡明であるが、目標の各領域の相互的な関連性の認識は、理論的には中国のそれより不十分なように見える。

両国の体育の課程目標は、それぞれ中学校の基本的な指導の方向（「基準」）を示したものであり、日本では「明るく豊かな生活を営む態度を育てる」ことが究極的な目標であるように見える。中国の課程目標は、教師と生徒が到達する期待された結果であり、「生徒の心身・社会適応能力と全体的健康水準を高める」ことが究極的な目標である。

しかし、日・中両国とも共通に「健康と人間の発達」、「心身一体」、「個人と社会健康の重要性」、「積極的な生活態度の養成」、「体力の作用」、「運動の参加意識」の 6 つの要点に注目している。

表 1 日・中両国における課程目標の比較

日 本	中 国
ア.積極的に運動に親しむ資質や能力を育てる。 イ.健康の保持増進のための実践力を育成する。 ウ.体力の向上を図る。	ア.体力を強めて、基本的な体育と健康の知識と運動技能を身につけ、応用する。 イ.運動の興味と趣味を育て、体を鍛える習慣を形成する。 ウ.よい心理的特性を保持、人と人との交流の能力と協力的精神を示す。 エ.個人的健康と集団的健康に対する責任感を向上させ、健康な生活様式を形成する。

	オ. 体育の精神を発揚して、積極的に楽観的で、朗らかな生活態度を形成する。
--	---------------------------------------

3. 学習領域の目標：

体育の一般的目標のもとに設定された学習領域の具体的な目標について、「学習指導要領」と「課程目標」に示されたものを整理して示すと表2のようである。

日・中の学習領域の目標は、その基本的な方向性において共通性が見られるものの、その提示の仕方において中国のほうがより明確に系統的であるようにみえる。すなわち、①運動の実践（参加）、②技能の向上（獲得）、③適切な正しい運動の実施と④公正さ（協力精神）などにおいてその方向性は同じである。しかし、日本の場合は、運動の内容などを示す中で提示している。中国は、この4つの方向を明確に示して、それらに対応して、内容を選択するよう提示している。

表2 学習領域の目標比較

日 本	中 国
体育分野 ア. 各種の運動の合理的な実践を通して、課題を解決するなどにより運動の楽しさや喜びを味わうとともに運動技能を高めることができるようにし、生活を明るく健全にする態度を育てる。 イ. 各種の運動を適切に行うことによって、自分の体の変化に気付き体の調子を整えとともに、体力の向上を図り、たくましい心身を育てる。 ウ. 運動における競争や協同の経験を通して、公正な態度や、進んで規則を守り互い協力して責任を果たすなどの態度を育てる。また、健康・安全に留意して運動をすることができる態度を育てる。	運動参加の目標 ア. 積極的な体育活動に参加する態度と行動を持つ。 イ. 科学的な方法で体育活動に参加する。 運動技能の目標 ア. 運動の基礎知識を獲得する。 イ. 運動技能を学習し応用する。 ウ. 安全的に体育活動を行う。 エ. 野外活動の基本的な技能を獲得する。 身体健康の目標 ア. 正しい身体の姿勢を形成する。 イ. 体力を発達させる。 ウ. 身体と健康について関心と意識を持つ。 エ. 栄養・環境・非行の身体健康に対する影響を理解する。 心理健康の目標 ア. 体育活動の心理健康に対する作用を理解し、体と心の発達の関連を理解する。 イ. 正しく体育活動と自尊・自信の関係を理解する。 ウ. 体育活動などの方法を
保健分野 ア. 個人生活における健康・安全に関する理解を通す。 イ. 生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能	

力を育てる。	通して気分を転換することを学ぶ。 エ. 困難を克服して強固な意志を形成する。 社会適応の目標 ア. 調和な交流を打ち立て、よい協力精神と体育的徳徳を持つ。 イ. 現代社会の中で、体育と健康の知識を獲得する方法を学習する。
--------	---

4. 「学習指導要領」と「課程標準」における内容：

両国の体育の内容について整理してみると、表3のようである。

体育の学習内容についての考え方には、日・中両国において、大きな差があるように見える。すなわち、日本では運動を「内容」として提示し、それに必要な態度と学習の仕方の内容等を示しているが、中国では具体的な目標との関係において、直接その目標を達成するのに適合する知識や態度や諸注意事項を内容として提示している。

日本における内容の提示の仕方では、各種の運動を実践すれば具体的に目標が達成されるという、「短絡的」な考え方ともとられる危険があるように見られるかもしれない。

表3 日・中両国の体育内容の比較

日 本	中 国
体育分野 ア. 体づくり運動 イ. 器械運動 ウ. 陸上競技 エ. 水泳 オ. 球技 カ. 武道 キ. ダンス ク. 体育に関する知識 保健分野 ア. 心身の機能の発達と心の健康について理解できるようにする。 イ. 健康と環境について理解できるようにする。 ウ. 傷害の防止について理解を深めることができるようにする。 エ. 健康な生活と疾病の予防について理解を深めることができるようにする。	学習領域一：運動参加 積極的な体育活動への参加 学習領域二：運動技能 ア. いろいろな運動種目の価値の理解 イ. 国内外の重要なスポーツ試合への関心 ウ. 運動の技術・戦術の能力の発達 エ. 運動安全の注意 学習領域三：身体健康 ア. 速度・有酸素スタミナと敏捷性の発達 イ. 体育鍛錬の形態と機能に対する影響の理解 ウ. 環境の健康に対する影響および運動の環境衛生上の必要性の理解 学習領域四：心理健康 ア. 体育活動を通して、自覚的な心理状況の改善 イ. 体育を通しての自尊と自信の確立 ウ. その他の気分を調節する方法の理解

	エ.自分の運動能力に応いた体育学習目標の設置 学習領域五：社会適応 ア.種類の運動における任務を理解し、体育中の道徳行為の識別 イ.体育と健康の実践のためにインターネットの選択と利用
--	--

51.9%で、日本は教師 10.6%、生徒 58.7%であった。

このように、運動の領域に関してみると、意識された達成度評価は、両国においてまた両国内の教師と生徒の間においても、異同があることが分かった。このことは両国の社会的背景や教育的状況を観察・分析して、より深く緻密に検討する必要があるであろう。

5. 運動の領域についての達成度の評価：
その達成度の平均値等は表4のようである。

- (1)「体力づくり」については、教師と生徒ともに、中国が有意に多く“できる”としている(教師:4.49>>3.47, 生徒:4.22>>3.38)。“完全にできる”とするものは、中国で圧倒的に多く(教師60.6%, 生徒52.3%), 日本では教師1.9%, 生徒4.6%であった。
- (2)「器械運動」については、両国において、教師・生徒ともに平均達成度に差がないが、教師のほうがより高く評価しているように見えた(教師:3.19≒3.27, 生徒:3.04≒3.01)。特に“できない”以下の評価が生徒に多かった(教師:中国26.7, 日本0.5と生徒:中国35.6, 日本27.5)。
- (3)「陸上競技」に関しては、教師・生徒とも中国がやや高い評価を示した。しかし両国において、生徒がより低い評価をしていた。これは“全くできない”とする生徒がより多いことによるものであろう。
- (4)「球技」の達成度平均に関しては、両国の教師と生徒の間には殆ど差はみられなかった。しかし、中国では“完全にできる”とするものは生徒に多く(40.5%), 日本では“できる”とみるものが教師に多かった(60.9%)。また、日本では“全くできない”とする生徒がより多く見られた。
- (5)「武道(術)」については、両国において教師と生徒の間に達成度評価に差があった(教師:中国3.39≒日本3.19, 生徒:中国2.25<日本2.51)。“できない”以下の評価に関して、生徒と教師の間に達成度意識の大きな違いがあった(生徒:中国59.9%, 日本53.2%と教師:中国19%, 日本15%)。
- (6)「ダンス」については、両国において明らかに教師と生徒の間に達成度評価の認識に差があった(教師:中国3.77>日本3.29と生徒:中国2.58>日本2.23)。“できない”以下の評価は、中国では教師:12.7%, 生徒

表4 運動の領域について達成度評価平均値

項目	対象	国籍	達成度(%)					欠損値	平均値	有意確率
			全くできない	できない	まあまあできる	できる	完全にできる			
体力づくり	教師	中国	0.7	1.4	6.3	31.0	60.6	0	4.49	***
		日本	0	4.8	44.9	47.3	1.9	1.0	3.47	
	生徒	中国	2.7	2.7	16.7	25.4	52.3	0.4	4.22	***
		日本	4.3	19.9	44.0	26.6	4.6	0.6	3.38	
器械運動	教師	中国	6.3	20.4	36.6	21.1	15.5	0	3.19	
		日本	0	11.6	49.8	37.7	0.5	0.5	3.27	
	生徒	中国	20.1	15.5	22.3	22.7	18.6	0.8	3.04	
		日本	4.6	22.9	44.3	21.4	5.8	0.9	3.01	
陸上競技	教師	中国	0	8.5	14.8	47.9	28.2	0.7	3.96	***
		日本	0	1.9	46.4	49.3	1.0	1.4	3.50	
	生徒	中国	7.2	13.6	24.2	17.4	36.7	0.8	3.63	***
		日本	4.3	19.9	44.0	26.6	4.6	0.6	3.07	
球技	教師	中国	0	5.6	31.0	33.1	30.3	0	3.88	**
		日本	0	2.4	34.3	60.9	1.9	0.5	3.63	
	生徒	中国	8.0	12.1	17.4	21.6	40.5	0.4	3.75	***
		日本	4.3	10.4	37.0	34.9	13.5	0	3.43	
武道(術)	教師	中国	4.2	14.8	36.6	24.6	18.3	1.4	3.39	
		日本	0.5	14.5	48.8	33.8	0	2.4	3.19	
	生徒	中国	41.3	18.6	20.8	9.5	8.7	1.1	2.25	**
		日本	17.1	36.1	28.7	13.1	4.3	0.6	2.51	
ダンス	教師	中国	1.4	11.3	21.8	38.0	26.1	1.4	3.77	***
		日本	0	10.6	47.8	37.7	0.5	3.4	3.29	
	生徒	中国	31.4	20.5	18.9	14.4	13.6	1.1	2.58	**
		日本	25.7	33.0	28.4	9.8	2.8	0.3	2.31	

6. 「知識」などの領域について達成度の評価：
達成度評価の平均値等は表5のようである。

「知識」等の領域は、運動の領域とは異なった目標・内容の領域である。これらについての両国の教師と生徒の達成度評価をまとめてみると以下のようである。

- (1)「知識」については、教師において日本は達成度評価がやや高いが、生徒では両国とも殆ど同じであった。日本の教師は“できる”とするものが多い(教師:47.8%, 生徒17.1%), 生徒で“できない”以下とみるものが多い(生徒:21.1%)。中国では教師の30.1%がそのように見ている(生徒は20%)。
- (2)「困難への挑戦」, 「運動における健康・安全」, 「生活を営む態度」および「競争と協同」については、いずれにおいても中国が日本より達成度評価が高く、中国

では教師の評価が生徒のそれより高かったが、日本ではこれらにおいてわずかではあるが生徒が上回っているように見えた。

表5「知識」などの領域について達成度評価平均値

項目	対象	国籍	達成度 (%)					欠損値	平均値	有意確率
			全くできない	できない	まあまあできる	できる	完全にできる			
知識	教師	中国	9.2	21.8	24.6	21.8	21.8	0.7	3.26	-
		日本	0	1.4	45.4	47.8	3.9	1.4	3.55	
	生徒	中国	16.7	13.6	34.1	17.4	17.8	0.4	3.06	
		日本	4.6	20.5	55.0	17.1	2.8	0.0	2.93	
困難に挑戦させること	教師	中国	0	0	13.4	46.5	39.4	0.7	4.26	***
		日本	1.9	22.2	51.2	24.6	0	0	2.99	
	生徒	中国	1.9	4.9	13.3	29.9	49.6	0.4	4.21	
		日本	4.6	22.3	41.3	23.9	7.3	0.6	3.07	
心と体を一体として発達させること	教師	中国	0	1.4	11.3	23.2	64.1	0	4.50	***
		日本	0	12.6	51.7	35.3	0	0.5	3.23	
	生徒	中国	2.7	3.8	11.4	39.8	42.4	0	4.16	
		日本	2.4	18.7	46.2	26.9	5.8	0	3.15	
運動や健康・安全について理解すること	教師	中国	0.7	0	6.3	38.0	54.9	0	4.46	***
		日本	0	3.4	49.8	45.4	1.4	0	3.45	
	生徒	中国	1.1	6.4	20.5	31.8	40.2	0	4.03	
		日本	1.2	7.3	45.6	36.1	9.8	0	3.46	
運動の合理的な実践すること	教師	中国	0.7	1.4	16.9	42.3	38.7	0	4.17	***
		日本	0	11.1	55.1	32.9	0.5	0.5	3.23	
	生徒	中国	1.1	7.6	20.1	31.4	39.8	0	4.01	
		日本	4.0	21.1	49.2	20.2	5.5	0	3.02	
積極的に運動に親しむ資質や能力を育てること	教師	中国	0.7	0.7	12.0	45.1	38.7	0	4.26	***
	日本	0	8.7	43.5	46.4	1.4	0	3.41	***	
健康の保持増進のための実践力の育成と体力を向上させること	教師	中国	0	1.4	7.0	38.7	52.8	0	4.43	***
	日本	0	15.0	50.7	34.3	0	0	3.19	***	

1)「挑戦」についてみると、中国では“完全にできる”とする生徒が教師より多く（生徒：49.6%，教師：39.4%）が、“できる”以上の評価は教師のほうが多かった（教師：85.9%，生徒79.5%）。日本では異同はないようにみえた。達成度評価は中国がより高い。

2)「運動における健康・安全」、「生活を営む態度」と「競争と協同」については、中国が高く、教師と生徒の格差は両国において異同はないようである。

3)「心と体の一体化」、「運動の合理的実践」および「楽しさと喜び」については、中国がより高く、両国ともに教師の方が達成意識が高いようであった。

4)「心と体の一体化」については、中国の教師が生徒よりも“完全にできる”と考えるものが多く（教師64.1%，生徒42.4%）、日本では“できない”以下とみるものが、教師は12.6%，生徒は21.1%であった。

5)「合理的実践」に関して、中国では“できない”以下の評価は教師にはないが、生徒には10%弱あった。日本では同じ評価の段階に対して、教師は11.1%，生徒は25.1%あった。

6)「楽しさと喜び」については、中国では生徒の59.1%が“完全にできる”とし（教師：46.5%）、日本では生徒の20.2%がそうであるとしながらも、12.2%が“できない”以下の評価をしていた。

この領域の多くの項目において、中国では日本より圧倒的に達成度評価が高いとしても、個別的に見ると教師と生徒の間に評価の差が見られたとあってよいであろう。

項目	対象	国籍	達成度 (%)					欠損値	平均値	有意確率
			全くできない	できない	まあまあできる	できる	完全にできる			
明るく豊かな生活を営む態度を育てること	教師	中国	0.7	2.1	20.4	33.8	43.0	0	4.16	***
		日本	0.5	8.7	58.0	31.9	1.0	0	3.24	
	生徒	中国	1.5	5.7	21.6	32.6	38.6	0	4.01	
		日本	4.0	12.5	47.4	25.1	11.0	0	3.27	
運動の楽しさや喜びを味わうこと	教師	中国	0.7	1.4	9.2	42.3	46.5	0	4.32	***
		日本	0.5	2.4	36.2	55.6	5.3	0	3.63	
	生徒	中国	1.1	3.0	11.4	25.4	59.1	0	4.38	
		日本	2.4	9.8	32.1	35.5	20.2	0	3.61	
運動の中で正しく競争や協同すること	教師	中国	1.4	1.4	8.5	35.2	53.5	0	4.38	***
		日本	0.5	5.8	48.3	42.0	3.4	0	3.42	
	生徒	中国	2.7	2.7	17	27.3	50.4	0	4.20	
		日本	1.8	6.7	37.6	42.5	11.3	0	3.55	
互いに協力して責任を果たすこと	教師	中国	0.7	0.7	12.7	34.5	51.4	0	4.35	***
	日本	0	3.4	49.3	45.9	1.4	0	3.45	***	

7. 教師たちの目標と内容の評価：

この結果は表6のようである。

(1)「目標の設定と考え方」についての教師たちの評価は、中国において高かった（中国：4.26>日本：3.28）。中国では“完全にできる”と考えるものが46.5%いたのに対して、日本では1.4%であった。日本では“まあまあできる”とするものが60.9%いた。

(2)「内容について」の評価は、上述と殆ど同様の結果であった。この評価の大きな違いはどこから来るものであるかについて、今後十分に検討する必要がある、またその価値があると思われる。

表6 目標と内容について評価

項目	対象	国籍	達成度 (%)					欠損値	平均値	有意確率
			非常に くない	よ くない	まあ よい	よ い	非常 によ い			
目標について	教師	中国	1.4	2.1	12.7	36.6	46.5	0.7	4.26	***
		日本	0	5.8	60.9	30	1.4	1.9	3.28	
内容について	教師	中国	2.1	1.4	11.3	31.7	52.1	1.4	4.32	***
		日本	1.0	7.7	59.9	28.0	1.0	2.4	3.21	

8. 生徒たちの運動と体育授業の好き・嫌いの評価：

その結果は表7のようである。

(1)「運動の好き・嫌い」について、中国では75%の生徒が“非常に好き”であるとしている。日本ではこれは29.4%で、“好き”あるいは“まあまあ好き”とするものも、同様に30%程度であった。また、“嫌い”以下の回答をしたものが10%いた。

(2)「体育の授業の好き・嫌い」については、上記と同様、中国の生徒は73.1%が“非常に好き”としている。日本の生徒は17.7%で、“まあまあ好き”あるいは“好き”とするものは35.5%と32.4%で、“嫌い”以下とするものが13.8%あった。

(3)「体育の内容の満足度」については、中国では、“完全にできる”と“できる”とするものは併せて57.2%あり、日本は33.0%であった。しかし両国において、“できない”とするものがともに20%近くあった。

表7 運動や体育授業の好き・嫌いについて評価

項目	対象	国籍	達成度 (%)					欠損値	平均値	有意確率
			非常 に嫌 い	嫌 い	普通	好 き	非常 に好 き			
運動が好きですか	生徒	中国	0.8	1.1	9.8	13.3	75.0	0	4.61	***
		日本	2.8	7.3	29.7	30.6	29.4	0.3	3.77	
体育の授業が好きですか	生徒	中国	2.3	1.1	7.6	15.5	73.1	0.4	4.12	***
		日本	3.7	10.1	35.5	32.4	17.7	0.6	3.32	
体育授業の内容に満足すること	生徒	中国	10.2	8.3	24.2	25.8	31.4	0	3.60	***
		日本	4.0	14.7	47.7	27.5	5.5	0.6	3.16	

これら両国の教師と生徒の、「学習指導要領」あるいは「課程標準」における目標領域や内容に関して、それぞれの達成可能度について、どのように考えているかを見てきたが、全体的にみると、中国のほうが達成度をより高く見ているようであった。この根拠がいかなるものであるかはこの調査では明らかではないが、このことを追求してみる価値はあるであろう。

また、両国において、教師と生徒における達成度の評価に違いが見られたことも、検討に値することであると思われる。教師が達成可能性を高く評価しているものと、生徒がそうであるとするものがあった。

さらに、中国の生徒において、運動や体育の授業を好む傾向が非常に強くみられたが、日本ではむしろ、その好き・嫌いの傾向が分散しており、これらの問題に関しては考慮する必要があるように思われる。特に、体育の内容に関して、必ずしも全的に満足しているのではないように見えることも、考慮する必要があるように考えられる。

IV. 結論

1. 中・日両国において、学校体育は重要な教育の分野として認識されていると見てよいであろう。
2. 両国の基準としての「学習指導要領」と「課程標準」は、その目標の領域において、共通に提示・設定されていると見ることができる。しかし適切な内容の提示のされ方においては、中国のほうが論理的であるように伺われる。
3. 教師と生徒による目標と運動内容の達成についての評価は、中国のほうが全般的に高く、また両国において、教師のほうが生徒より高く評価しているようにみられた。しかし、評価の各段階に対する回答は、必ずしも一定の傾向があるとはいえなかった。
4. 教師と生徒の間に評価の程度に関して相違があり、しかも生徒のほうが達成度に関してより低い評価をしているように見えることは、検討に値する問題である。

う。

5. また、日本において、“まあまあできる”とか“できる”とする評価が多くみられ、中国において“完全にできる”とか“できる”とする回答が多くみられたが、これらが実際にそうであるかどうかについては、客観的な基準と手順を設けて測定評価してみる必要があるであろう。

V. 今後の課題

1. 中・日両国における目標達成度に見られる傾向の差の理由を究明する。
2. 達成度の自己評価結果の科学的な基準と手順による客観的な検証をする。
3. 体育における学習成果（目標達成度）の客観的な国際比較の可能性を検討する。

参考文献

1. 文部省（平成 11 年 9 月）：『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説 一保健体育編一』 東山書房
2. 教育部・国家体育总局（2001 年）：『九年义务教育体育（1-6 年几级）普通高级中学体育与健康（7-12 年几级）课程标准』
3. 课程教材研究所・体育課程教材研究开发中心编著（2001 年 7 月）：『体育与健康 7~9 年几级 全 1 册教师教学用书』 人民教育出版社
4. 杉山重利・高橋健夫・園山和夫・細江文利・本村清人編集（2001）：『新学習指導要領による中学校体育の授業 上巻』 大修館書店
5. 杉山重利・高橋健夫・園山和夫・細江文利・本村清人編集（2001）：『新学習指導要領による中学校体育の授業 下巻』 大修館書店
6. 『宮城県教育関係職員録 2004』 宮城県教育会館
7. 沈阳教育网：『各区基础教育概况』
<http://www.syn.cn>
8. 本村清人・戸田芳雄監修／和唐正勝編（2003）：『新しい課題に対応する中学校保健体育科の授業モデル 5「保健学習」編』 明治図書
9. 高畑栄一（1999 年 7 月）：『学校体育 1999 年 7 月臨時増刊号 第 52 卷 8 号 改訂「学習指導要領」の基本的な考え方と内容の解説』 日本体育社
10. 井上一男・高橋亮三・望月健一編 1982 年 7 月：『体育教育概論』 杏林書院
11. 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編集（2002 年 4 月）：『体育科教育学入門』 大修館書店
12. 樊临虎著（2002 年 7 月）：『体育教学论』 人民体育出版社
13. 毛振明編（2003 年 1 月）：『体育教学改革新视野』 北京体育大学出版社
14. 赖天德著（2003 年 1 月）：『学校体育改革热点探究』 北京体育大学出版社
15. 曲宗湖・杨文轩編（2000 年 1 月）：『学校体育教学探索』 人民体育出版社
16. 岸本肇・孟白麗（1991 年 10 月）：『日中体育の比較研究』 神戸大学教育学部研究集録 神戸大学教育学部
17. 團琢磨・毛振明（1988 年 3 月）：『日本と中国の学校体育の比較分析』 岡山大学教育学部研究集録 岡山大学教育学部 I
18. 体育天地：『中小学体育与健康课程的主要特征是什么』 2004 年 8 月
<http://stqz.stedu.net/sport/jxjy/1-1.htm>
19. 人教期刊 2002 年 12 月 15 日：『新课程标准实验与体育教学改革』
<http://www.pep.com.cn/200212/ca3852.htm>